

シューマンの歌曲集「リーダークライス作品24」(1) —歌手とピアニストの為の演奏と解釈—

野々垣 文 成

1. はじめに

シューマンの歌曲集「リーダークライス作品24」の歌手とピアニストの為の演奏と解釈について取り上げる。歌手とピアニストはあくまで演奏自体で評価されることが通常であり、演奏の内容を文字化することは稀である。しかし演奏家の参考の一端を担えればとの思いであえて執筆する。今回はシューマンの生涯と音楽の作風、全9曲中の第1曲目の演奏と解釈を論じる。

2. ロベルト・シューマンについて

彼の正式名はロベルト・アレクサンダー・シューマン (Robert・Alexander・Schumann) である。通称ロベルト・シューマンと呼ばれている。1810年6月8日生れである。同年にはポーランドでフリデリック・ショパン (Fryderyk・Copin) が生まれている。シューマンの生誕地はドイツ・ザクセン州 (旧東ドイツ) のツヴィッカウ (Zwickau) である。彼の父親は書籍商で自らも著実をしていた。母親は外科医の娘で教養高い人物であった。彼は父親からの影響で文学に深く傾倒し、又、研ぎ澄まされた感性と繊細な感情は母親から受け継いだものと考えられている。7歳からピアノを習ったが、たぐいまれにみる速い進歩と才能を示している。11, 12歳位からピアノ曲、合唱曲、管弦楽曲の作曲を手掛けている。父親はその当時著名であった作曲家カール・マリア・フォン・ヴェーバー (Carl・Maria・von・Weber) (1786年生) に師事させて作曲の正式な勉強をさせようとしたが実現までには至らなかった。シューマンは中学生の終わりのころからロマン主義の文学作品を多く読み多感な青春に深い影響を与えている。主な作者としてはバイロンやジャン・バウル・リヒターの幻想的作品が挙げられる。1826年に父親が死去したため母親はライプツィヒ大学に入れ法律の勉強をさせた。しかしシューマンは法律よりも哲学に強い興味を持ちカント、シェリング、フィ

ヒテ等の観念論哲学に没頭した。その後ハイデルベルク大学のティボー教授に傾倒し転校したが20歳の時に当時世界1のバイオリン名手パガニーニ (Paganini) (1782年生) のバイオリンの演奏を聴いて今後の自分の生涯は音楽の道しかないと確信をしている。シューマンはその後母親の許しを得て当時ヨーロッパで著名なピアノ教師であったフリードリッヒ・ヴィーク (Friedrich・Wieck) の下で研鑽を重ね始めた。彼はヴィーク家に寄宿したのだが、同時にドルンについて作曲も学びだした。しかしシューマンの思いは世界的なピアニストになる事であった。元来人間の手は4の指 (薬指) が軟弱である。彼の弱点も同様で、その指の強化の為、彼自身で考案した器具で右手の4の指の骨折を招いてしまった。その為シューマンはピアニストになることを断念せざるをおえなくなった。その後、作曲と文学に全精力をつぎ込むこととなった。作曲家としての活動は1840年までにピアノ曲を中心に作曲されている。作品1から作品23までである。作品1は「アベック変奏曲」でありアベック夫人に献呈されている。主題にアベック夫人のABEGGの音を配列させテーマの展開を図っている。このことよりわかるのだが作品1からすでに他の作曲家にはない哲学的な発想を感じさせている。この初期の作品群はシューマンの独創性と独特な表現が顕著に出ている重要なものである。1834年、シューマン24歳の時に作曲活動と並行して音楽雑誌「音楽新報・Neue Zeitschrift fuer Musik」を創刊している。この活動は1844年まで11年間にわたって行ってきたが当時の保守的な音楽界に対抗して自由で新しく強い音楽を支持していた。シューマンはこのグループに「ダビッド同盟・Davidbünd」名づけ、対する保守グループを「フィリスティン・Philistines」と名付けている。この名前と同名なピアノ作品も作曲されている。(作品6) この刊行物に発表した音楽論文・論評は大変価値のある内容で当時の音楽界に大き

な影響を与えている。この活動のもう一つの特出できる大きなことはショパン・メンデルスゾーン・ブラームスやベルリオーズなど若い音楽家を世に紹介していることが挙げられる。同時に彼らの新しい音楽を強力に世の中にアピールし支持した。その中に特に有名な論文のひとつとしてブラームスについて「新しい道・Neue Bahnen」が挙げられる。この論文は1853年に書かれ、シューマンの晩年にあたる。さて、ここで本題のシューマンの音楽歴について述べていこう。シューマンは1830年、当時絶大な力を持っていたヴィークにピアノを習うようになった。そして彼の娘クララと激しい恋に落ちたことは音楽を勉強している者以外でも知っていよう。ヴィークはシューマンとクララの結婚について猛烈に反対した。1840年シューマンが30歳の時によく結婚できた。前述したようにシューマンの指の故障はピアニストになることを断念せざるを得なく、作曲に活路を見出していた時期である。彼は歌曲をはじめ、交響曲や室内楽曲も手掛けていった。幅広い分野で作曲をしていったのだが必ずしもすべての作品が成功であったとは言えない。しかし、室内楽曲の弦楽四重奏、ピアノ五重奏曲、ピアノ四重奏曲は後世に残る傑作と言える。シューマンは同時代のブラームスの新古典主義（古典時代の様式のように厳格な様式による楽曲）には感銘できずにいた。1843年、メンデルスゾーンがライプツィヒに音楽学校を創始したと同時に講師として招かれたが彼の想いとは不適で短期間で職を辞している。ライプツィヒ滞在中にはロシアにクララと演奏旅行にも出向いている。ライプツィヒを去ったのちはドレスデンに1850年まで滞在した。ドレスデン時代は個人教授をしながら創作に没頭した。1847年にはLiedertafel（リーダーターフェル）の指揮者となり翌1848年にはChorgaesangfehleln（コールゲザングフェライン）を結成した。1850年にはデュッセルドルフ市管弦楽団および合唱団の指揮者となり移転している。1853年の秋には若いころからのその兆候を見せていた精神錯乱が激しくこの地位も追われることとなる。この間にも彼とクララはライプツィヒ、ハノーバーやオランダにも演奏旅行を行っている。1854年2月6日には精神病院を抜け出しライン川に身を投げた。幸いに

も命は取り留めたがその後ボン郊外のエンデニヒの精神病院に入ったまま1856年7月29日、46歳の若さでその生涯を閉じた。

3. クララ・シューマンについて

ここでクララ・シューマンについても少し述べてみたい。クララ・シューマン（Clara・Schumann）は1819年9月13日にライプツィヒに当時の著名なピアノ教師であったフリードリッヒ・ヴィークの娘として生まれている。クララの産みの母親は父親ヴィークと離婚をし義母によって育てられた。クララは生まれつきの軽い難聴を患い父、義母からもかまってもらえない不幸な幼少期を過ごしている。5歳の時から父ヴィークより厳しいピアノ教育を受け7歳からあらゆる音楽的分野の専門教育を受け始めている。彼女は生涯女流ピアニストとして活躍している。9歳の時には演奏会も開いている。1832年ヴィーン滞在中に《帝室名演奏家》の称号を受けている程の名ピアニストであった。ロベルトとの結婚では父ヴィークから強い反対にあった。ロベルトの死後クララは子ども達とベルリンに移り住み、リヒテンタールを経てフランクフルトにて没している。1878年から1879年の2年間はフランクフルト音楽大学のピアノ科の教授も務めている。クララは生涯を通し夫ロベルト・シューマンの良き理解者と共に解釈者であった。ロベルトの死後は彼の作品を欧州各地で演奏し広めることもした。これはもちろん生活手段の一端もあったが。この陰にはブラームスの影の多大な支援も垣間見られる。事実ブラームスはロベルトの息子Felix・Schumann（フェリックス・シューマン）の詩に曲をつけ作品を発表している。「Meine Liebe ist gruen（わが愛は緑）作品63No. 5である。彼は文学者を希望していたが全く頭角を現すことはなかった。のちの世にブラームスはクララに愛情を抱いていたとの言い伝えはあるがこれはブラームスのシューマン一家に対する好意と支援であると言える。クララ・シューマンの業績はピアニストだけではない。実際に作曲活動も手掛けている。多くの歌曲、ピアノ小品、ピアノ協奏曲等が残されている。現在ヨーロッパでは歌曲の演奏がされている。当然現在クララ・シューマン歌曲

集は刊行されている。クララは幼少期よりピアノのみの生活を送っていたのであまり家庭的ではなかったという話もドイツでは言い伝えられている。音楽的な強い繋がりでロベルトとのおしどり夫婦との評を得ているがロベルトの實の想いは今となっては図ることはできない。クララ・シューマンの肖像はかつてのドイツ紙幣100マルクに使われていた。

4. ロベルト・シューマンの音楽について

シューマンの音楽の基盤はピアノと歌曲であると言える。もちろんオーケストラ作品も秀作は多々ある。交響曲は4曲作曲されている。中でも第3番の《ライン》は吐出ししている。2曲の未完成交響曲も存在している。他の管弦楽曲も多く作曲しているが、彼は管弦楽は得意分野ではなかった。しかし交響曲第1、4番はブラームスの交響曲の先駆的な意味として重要な役割を果たしている。特にピアノ曲と歌曲分野においてシューマン独特の作曲技法として演奏家の間でかなり重要視されているシューマニズム (Schumanismus) が挙げられよう。譜面上のrit. (遅く) とそこに付随している……の意味である。(譜例1) 譜面には事細かく記入されていて演奏家はそれを忠実に理解し、演奏しなければ到底シューマニズムのきいた音楽にはならない。特に歌曲においては音楽よりも言葉自身についていて言葉の表現、しいては詩全体の表現をする効果に繋がっている。19世紀における標題音楽はすでにフランスにてベルリオーズ (1803~1869) が先駆的役割を担っている。ドイツでの標題音楽の創始としてはベルリオーズの同時代のシューマンであろう。音楽と文学の融合は以前からであるが、さらに新たな結びつきに発展させたのが音楽史に与えたこの時代の大きな成果であったであろう。シューマンは文学的、あるいは文学的観念を音楽の構成の基礎に置くという新たな手法を完成させたのである。作曲家は一つの標題、つまり提示されているテーマから自己の感性、インスピレーションを音楽に自由に表現していくことである。標題は詩的想念でありそれを音楽として表現する。シューマンの標題音楽は彼なりの独自の世界観の中からかなり自由な形式にて作曲されている。独自の音楽形式がここド

イツにてさらに発展するきっかけが生まれたのであった。シューマンはドイツロマン派の標題音楽、自由作風の創始となった。たぶんこの創作意図の難解さが我が国の多くのピアニストのシューマンの作品に対する演奏不得意の原因となっているのであろう。数多くのピアニストの感心できない不可解な演奏となっているのはここが大きな原因であろう。演奏家は演奏技術と感性のみで演奏できるものではないことはもはや明白であるが、それは多くの演奏家が音楽の最深部の本質に迫ることが出来ない大きな教養的な欠落が原因であろう。彼の作風は豊かな幻想にあふれ、激しい情熱を秘めている。シューマンの全作品の中でこれらの特色が吐出ししているのはピアノ曲と声楽曲であると言える。

5. シューマンの歌曲について

シューマンの声楽曲の分野はピアノの分野と同様に重要な意味を持っている。声楽曲の中にはオペラ、ミサ曲、カンタータ、合唱曲、重唱曲、独唱曲と全分野に及んでいる。これらの分野の中で代表的なのは独唱曲であることは言うまでもない。主な作品として今回取り上げている歌曲集《リーダークライ Op.24》(ハイネ詩)、歌曲集《ミルテの花》(複数の詩人による詩)、歌曲集《リーダークライ Op.35》(ケルナー詩)、《リーダークライ Op.39》(アイヒェンドルフ詩)、歌曲集《女の愛と生涯 Op.42》(シャミッソー詩)、歌曲集《詩人の恋 Op.48》(ハイネ詩)等が挙げられる。シューマンは他の歌曲作曲家よりも文学的造詣が深い。歌詞の選択には一定の彼の価値観によって選別されており、彼のロマン的な好み合った詩のみに作曲されている傾向がある。かなりのこだわりが伺えられる。しかし原詩にシューマン自身が手を加えることもほとんど見られていない。シューマンはより新時代の詩人の作品に傾倒していたことも事実である。シューマン歌曲のピアノパートは今までの歌曲以上に充実させ重い意味を持たせる手法を確立させた。作品1~作品23まではピアノ曲のみを作曲していることは前述しているのだがピアノに対する思いは人一倍であった。歌声部が終わってもピアノパートが曲全体の一番の盛り上がり表現することも多々ある。前奏、間奏、後

奏共に歌声部と同等に重要視しているのである。シューマンはクララとの結婚で作曲活動を歌曲に切り替えたわけであるが、彼の精神異常による傾向とも見ることもできる。そこから読み取れる彼のこだわり、束縛感がそうさせていたのであろう。以上のことから『歌の年』と言われている所以である。『歌の年』は1840年である。《リーダークライス》とは歌曲の集団、すなわち歌曲集という意味である。このリーダークライスとは詩の内容が直接密につながっているのではなく前後の曲の内容が何らかの関係を持っている歌曲集のことである。その他にも数多くのロマンスとバラード等もある。シューマンの歌曲は詩に対する深い解釈、音楽的な繊細な表現、ピアノパートの表現の深さなどが特徴的であると言えよう。シューベルトの歌曲を更に心理的、表現的に発展させたものと言えるが著者はシューベルトの歌曲の本来の創作原点とは相いれないものを感じる。シューベルトの歌曲と同じ流れの上で発展してきているとは思えない。シューマンの歌曲をはじめ全作品の根底には哲学と文学とに深い基礎知識を持った高い知性が支配しているからであろう。シューマンとクララとの結婚にクララの父ヴィークが猛反対しシューマンのみではなく愛娘クララに対しても数多くの音楽的妨害をした。シューマンに対して幾多の捏造した事柄で妨害をしていた。シューマンは法律を学んだ経験より裁判にて争い念願のクララとの結婚にこぎつけていた。シューマンは生涯で138曲以上作曲しているのだが前述した『歌の年』にあたる1840年に半数以上の曲を作曲している。これはロベルトがクララとの結婚を機にクララに対する愛の感情があふれ出たことで多くの歌曲作曲をし『歌の年』と言われることとなった所以である。シューマンは歌曲の作曲の際の詩の選択には彼自身の基本的欲求である詩人の魂の繁栄を第1に考えている。鍵盤に向かって指を駆使して作曲する方法ではなく立ったまま、あるいは散歩をしながら、というように自然の中に自身を置き強い感性の下で作曲をする姿勢であった。シューマンの傑作歌曲「くるみの木」はクララに送り自分の作曲感性の変化を告げている。“そっと、きみ自身のように素直に歌ってみてください”と添えていることから彼

の作風変化がよく伝わってくる。表現の自然さ、音の内面性、何よりも吐出しているのが旋律の美しさである。シューマン以外の作曲家の歌曲作品では詩を重要視し詩の句読点で必ず息継ぎをすることは常識である。しかし、シューマンの歌曲の旋律線の美しさから詩を犠牲にしても旋律を重視する傾向がある。すなわち詩の重要性を尊重して旋律線の流れを息継ぎによって中断することは避けなければならないのである。シューマンの歌曲作曲の基本は「息吹のようにあれ」であることから理解できる。シューベルトの歌曲との類似点は民謡の持つ直接性を持ち詩は音楽になりやすいものを主に選んでいた。シューベルトの歌曲全般はかなり一般的に取り入れられたがシューマンの歌曲はごく少数であった。シューマンの旋律はかなり高度のテクニックを持つ歌手にとってもかなり演奏が難しいものである。ピアノパートも今までの歌曲よりもかなりデリケートな表現をしている。歌声部のみが詩の内容を表現しているのではなくピアノパートにも歌声部同様な表現を与えている。最後にシューマンの歌曲集は全3巻出版されている。1巻は「歌の年」を中心とした名作が載っている。2巻は「リーダークライ Op.35・ケルナーの詩による12の歌曲集」をはじめ様々な名作が載っている。3巻についてはシューマン自身かなり精神病を重く患っている時期と重なっていた時期の作品でドイツ人でも容易に演奏できない難解ぞろいである。ドイツにおいても現在なお演奏する機会のごくまれである。

6. 「リーダークライス Op.24」

この歌曲集はハイネの“若き悩み”の内容である詩によるもので9曲からなる歌曲集である。この歌曲集の作曲についてシューマンはクララに手紙を書いている。「先日、ハイネの連作詩集からなる大きな歌曲集をすっかり完成しました。……この曲を作曲している間中、僕は君のことばかり考えていました。君という婚約者がいなかったら、このような音楽は書けなかったことでしょう。……」と送っている。このハイネの詩は『歌の本・Buch der Lieder』からの9編に作曲されている。シューマンがピアノ曲から歌曲への作曲転換したもっとも初期の作品である。シューマン

的な独特の手法もかなり織り込んでいるが本来の彼独特の様式の確立までには至っていない。歌曲集全体はまだイタリア歌曲やシューベルトの晩年以前の作品からの影響を受けていると感じる。

この歌曲集全体の標題は詩の初めの節が曲の題名になっている。

第1曲『毎朝僕が起きると』“Morgens steh ich auf”

歌曲集の幕開けはデリケートな感情の動きを持つ小品である。恋に悩む若者の朝から夜までの心理を詩の中におり込んでいる。若者の悩みと夢うつつの状況をデリケートな転調とリタルダンドで簡潔に表現されている。D dur (ニ長調)の夢見のようなAllegretto (やや快速に)で始まる。 $\text{♩} = 96$ 位であろうか。この詩にはR.FranzとF.Listも作曲している。恋する乙女が今日来るかどうかという問いかけから始まり、ピアノパートは若者の心臓の鼓動を表現している。曲はあくまで即興的で自由なリズムをシューマニズムによって絶えず乱している。歌詞の内容は“毎朝目を覚ますたび

に、いとしい人が今日こそ来るかと自問し、夕方には落胆し、彼女が来ないことを嘆く。夜には悲しみに眠れず、昼はまどろみ夢うつつでさまよう。”と歌っている。第1曲より既に若者の願いが叶えられる望みは感じられない。後奏はシューマンの作曲技法上典型的な弱起 (auf Takt) を巧みに使った表現である。三連符の前打音と共に後奏は溜息のように消えている。この曲自身前述しているようにかなりの心の動揺を表現しているが、さらに3カ所出てきているritは心の揺れをさらに強調していると言える。第11, 12小節と後奏の第37, 38小節、第41, 42小節、第45, 46小節の弱拍のアクセントは心臓の動悸の乱れの表れである。以上の細かい指示を歌手とピアニストは忠実に表現しなければならない。後奏では若者の払拭できぬ思いを憂いを残し微妙な心の揺れと共に不安定な終止をしている。演奏家はシューマニズムをはっきりととらえ作曲家シューマンの創作意図を聴衆に忠実に伝える義務があることを意識しなければならない。

譜例1

Morgens steh ich auf und frage.

(Heine.)

R. Schumann, Op. 24. N^o 1.
(Original - Ausgabe.)

1 *Allegretto.* *p*

Singstimme. Mor - genssteh ich auf und fra - ge:

1. *p*
Pianoforte.

9 *rit.*
kommtfeins Lieb - chen heut? A - bendssink ich hin und kla - ge: aus blieb

18 *ritard.*
sie auch heut, auch heut. In der Nacht mit mei - nem Kummer lieg ich schlaflos,

27 *rit.*
lieg ich wach; träumend wie im hal - ben Schlum - mer, träumend wand - le ich bei

36 Tag. *ritard.* 45

Morgens steh ich auf und frage.

(Heine.)

R. Schumann, Op. 24, N^o 1.
(Original - Ausgabe.)

1 Allegretto. *p*

Singstimme. Mor - genssteh ich auf und fra - ge:

1. Pianoforte. *p*

9 *rit.*
kommtfeins Lieb - chen heut? A - bendsink ich hin und kla - ge: aus blieb

18 *ritard.*
sie auch heut, auch heut. In der Nacht mit mei - nem Kummer lieg ich schlaflos,

27 *rit.*
lieg ich wach; träumend wie im hal - ben Schlum - mer, träumend wand - le ich bei

36 Tag. *ritard.* 45

Morgens steh ich auf und frage.

(Heine.)

R. Schumann, Op. 24. N^o 1.

(Original - Ausgabe.)

1 *Allegretto.* *p*

Singstimme. Mor - genssteh ich auf und fra - ge:

1. *p*

Pianoforte.

9 *rit.*

kommt feins Lieb - chen heut? A - bend sink ich hin und kla - ge: aus blieb

18 *ritard.*

sie auch heut, auch heut. In der Nacht mit mei - nem Kummer lieg ich schlaflos,

27 *rit.*

lieg ich wach; träumend wie im hal - ben Schlum - mer, träumend wand - le ich bei

36 *ritard.* 45

Tag.

The Schumann Song Cycles“Liederkreis Op. 24”Vol.1 —Performance and Interpretation for the Singer and Pianist—

Nonogaki, Fumishige*

声楽の分野では演奏が全てである。その演奏の助けとして歌手とピアニストの為の演奏法の解釈、分析が必要であり重要となってくる。現在、声楽の分野ではそのような文献がまだ不十分である。特にその中でもドイツ歌曲の分野では世界で最も優れている詩人の作品に才能ある作曲家が曲をつけていることでも知られている。筆者自身ドイツ歌曲専門の歌手であるため、ドイツ語圏の最高の芸術作品であるドイツ歌曲の演奏法と解釈に注目している。

キーワード：ロベルト・シューマン, リーダークライス作品24

